今年は2年前から始

まった第3次ウッドショックという騒乱を経て、鎮静の場を探る年になる。既に針葉樹製材品や構造用集成材、国産材丸太などが最高値から値下がりしている。内外産合板は値上げのばねを失いながらも、需給調整を続けることで居所を保っている。木材製品のなかでも構造材で価格が先行した集成管柱の単位当たりの価格は合板を下

回った。

言うまでもなく、先の価格高騰は需給バランスの崩れによるバブル現象であった。バブルが破裂したわけではないが、価格上昇の勢いともいえる内包する「ガス」が放散する過程にある。いつ、どのような状況でバブル収縮が収まるのが今年最大の関心事である。過去のウッドショックはいずれも、米材や南洋材の産地事情から

発生したものである。

今回は、新型コロナウイルス感染症拡大によるパンデミック（世界的流行）から派生したサ

うした騒動はすべて輸入木材に端を発したものだ。幸い国産材も価格の居所を大きく引き上げることができ、丸

とができるようになったのも、輸入材に追隨して国産材丸太が値上がりした結果だ。

同時に、木材界に身

今ある木材の価値を守る努力を

無駄にするな、ウッドショックの遺産

巻頭時評

プライチェーン（供給網）の混乱が世界を巻き込んだ。いずれにしても、こ

太価格が一定水準に保たれるならば持続的林业経営が可能という声を林産業界から聞くこ

を置く多くの人々が国産材に目を向け、輸入木材の足らざるところ、不安なところを国産材で担保していかうとする姿勢が強まった。木材の自給率を高めることでぶれが少ない木材需給を構築して

いくべきだという思いと期待が高まっていることを感じる。

では、国産材に需給安定の主導権を握る力があるかといえは、残念ながらそうとは言えない。

一例が需給調整機能である。これが、うまく作動しないために、時として国産材から予期せぬ価格が発生する。資材の安定確保のためにやむなく民間が自力で資材供給網の構築に乗り出す動きも出てきた。これは大いなる進歩だが、国も民間の動きに即応した需給安定策を支援していく

必要がある。

木質資源は、人類が生命を維持するうえで重要な産物である。CO₂を吸収して地球温暖化を防止し、酸素を放出してエネルギー資源となり、建築ほかの資材となる。人々に安心感や安らぎをもたらす能力もある。価値ある資源の価値をさらに高めることができるのは、その恩恵を受ける人類のほかにはない。だからこそ、今ある木材の価値を下げてはいけない。根源的意思を確認してこれから先の木材界の進歩を目指そうではないか。

2023年

新春特集